

フランス語版人文地理学概説書についての一考察

—— 1920年代から1990年代まで ——

大 嶽 幸 彦*

(平成17年4月28日受付：平成17年5月31日受理)

要 旨

本稿はこの30数年間に集めたフランス語版人文地理学概説書について、その内容の変化、研究対象の変遷について考察したものである。英語版と違って人文地理学概説書をあまり書かないフランスでは管見の限り7冊のみ分析できた。

KEY WORDS

Human Geography in French フランス語版人文地理学概説書

Themes of Reserch 研究テーマ

1 はじめに

筆者は既に英語版人文地理学概説書についての考察を行なったことがある¹⁾。その際、フランス語版の人文地理学書については、時間の関係で割愛すると述べた。『20世紀半ばにおけるフランスの地理学』²⁾でもわかるように、系統地理学の分化が進んだフランスでは、人文地理学全般の体系書を書いている地理学者は少数であり、翻訳は別として、筆者個人で所有している人文地理学書は7冊にすぎない。人文地理学概説書も著者の没後、関係者によってまとめられたものや、不完全に終わっているものもある。系統地理学のある分野の専門家としての他に、フランスの各地、あるいは世界の国についてのリージョナル地理学を書いているフランス人地理学者にとって、人文地理学全般を扱う体系書は書きにくい状況にあると見るべきであろう。日本地理学会の会長演説の中で渡辺 光は次のように述べている。「一般に西洋の地理学者は例外なく系統地理学中にある分野を専門に持ちつつ、自国及び、又は世界のある地域に専門の取扱地域をきめて、そこの地誌の専門家になるように養成され、義務づけられております。特にこのことは、フランスでは徹底していて、ドクトル論文は多く地誌であります。しかし最近はその伝統が崩れつつあると言うのであります。」³⁾。フランスの地理学者も世界の地理学者同様系統地理学の専門家になっており、あらゆる分野を網羅した人文地理学の概説書を書く研究者がほとんどいなくなっているのである。従って、英語版人文地理学書のような研究対象、研究動向、研究テーマの変遷をフランス語版で追うことは困難である。

以下、発行年次順に、著者名、タイトルを記した後に、内容の概略を述べ、考察を試みることにした。なお、今回も翻訳されている人文地理学概説書については、一部参考文献に挙げるにとどめた。

* 社会系教育講座

2 フランス語版人文地理学概説書の概要とその考察

今回はフランス語で書かれた人文地理学書を対象にしたが、英語版に比べてはるかに少なく、たった7冊しか個人で所有していない。前回と同様、辞典類は対象からはずし内容の一部が人文地理学について論述しているものも参考文献に挙げるにとどめた。以下、年代順に著者名、文献名、概要の順に取り上げてゆくことにしたい。年次がかなり飛ぶが、それ程人文地理学概説書が書かれていないことの証左である。

2.1 P.Vidal de la Blache『人文地理学原理』, 1921年

本書は岩波文庫より『人文地理学原理』として飯塚浩二訳⁴⁾が出ており、ここで取り上げる対象にはならないが、専門書の売れない地理学分野にあって、版を重ねている有名な本であるのであえて1冊に加えた。著者の書齋にあった草稿を基に、娘婿のエマニュエル・ド・マルトンヌ（気候学）がヴィダルならこのようにまとめたであろうと考えて編集した（pp. v-vii）こともよく知られている。ここでは翻訳によらず、個人所有原書での筆者の訳で見てゆきたい。

まず序では、人文地理学の意義と対象が書かれていて、人文地理学の物の見方について批判的に吟味する。次に、有名な「地的統一」の原理と環境の概念を考察する。さらに、人間と環境について論じている。4番目として、地理的因子としての人間を論じて終っている。

第1部は地球上における人類の分布で、巻末にある多色刷の図を作りながら説明している。第1章は全体の概観であり、分布の不均等性と変則を指摘する。第2章は人口密度の様相である。第3章はアフリカとアジアの例で、人間の大集積について論じている。エジプト、カルデア（古代メソポタミア南部の地域）、中央アジア、中国、インド、アジアの列島-日本、そして結論となっている。第4章はヨーロッパの大集積（アグロメレーション）である。第5章は地中海地域と題し、弱点、灌木栽培の役割、諸河川、高地帯、山岳の役割、アラブの影響で結んでいる。第6章は結論で、結果と偶発事が論じられている。人口に関しては、地理的原因はなんら人間に影響を与えないし、あったとしても社会的事実を介してであると述べている（p. 98）。ラッツェル流のいわゆる環境決定論を意識し、反論する立場での叙述である。

第2部は文明の諸類型である。第1章は集団と環境である。第2章は道具と設備であり、博物館の研究への興味から始めている。第3章は栄養の手段で、地中海型、中央ヨーロッパ型、北欧型、アジア型（米、中国型、日本型）に分けて考察し、最後に、耕作型の普及について論じている。第4章は建築材料で、乾燥地帯での粘土、地中海地域での石材、中央ヨーロッパと西ヨーロッパにおける木材と石材、北欧における木材について考察している。第5章は人間の諸施設（設備）で、位置、集村-農地と村落-、散村、亜熱帯地域型と北極周辺型が論じられる。第6章は文明の変遷で、改良への自然的傾向、停滞と孤立、接触、侵略による接触と生活様式の対立、海上交易の発展による接触、進歩の地理的特徴、中核を扱っている。

第3部は交通で、第1章は輸送手段、第2章は道路、第3章は鉄道、第4章は海上輸送である。最後に断章として、人種の形成、発明の伝播（道具と家畜）、生活様式概念と文明の領域、都市が掲載されている。

有名な本である割に、第1部を除いて体系だっておらず、構想段階やメモ書き程度に終わっているものがある。書齋の机の上に草稿が散らばっていたというからヴィダルの死が突然訪れ、

娘婿のマルトヌスが体系的に整理したようである。しかし、各章も起源から問題を論ずる歴史的方法や、民族学の資料を使うなど、歴史学から地理学に進んだヴィダルの幅広い知識と識見が見出される本である。

2.2 Albert Demangeon 『人文地理学の諸問題』, 1942年

アルベール・ドゥマンジョンはソルボンヌの人文地理学の教授であった。1872年生まれで1940年に逝去したドゥマンジョンについては、ド・マルトヌスによる追悼記事が最初に掲載されている (pp. 1~10)。また、谷岡武雄の紹介もある⁵⁾。次に、著作目録が掲載されていて、この本に採録されたのは、ほんの一部であることがよくわかる。1905年の学位論文「ピカルディー平野」が地誌のモデルとして特に有名である。

第1部は一般地理学で、まず人文地理学の定義がなされる。次に、過剰人口の問題が論じられ、さらに、経済的諸問題として、国民経済の現状、国際経済の新しい様相、鉄道と道路が論じられている。一般地理学の大きなテーマは農村集落である。最初に、西ヨーロッパにおける集落形態への農地制度の影響が取り上げられる。次は農村集落の地理学で、散居集落と集居集落の問題を論じている。さらに、農業経済と農村人口、農村家屋の分類についての一試論が掲載されている。

第2部はリージョナル地理学で、まず最初はリムザン地方の山地、人文地理学的研究で、山地における経営の条件と特徴が述べられる。次は、フランスにおける農村集落で、主要な類型の分類試論である。フランス各地の例が多数の図で示されており、参考となる。次は、フランスにおける農村人口の類型で、1万分の1の地図の抜粋が多数つけられている。次に来るのは、フランス北部とアメリカとの関係で、商業地理学のスケッチと題している。次は、ダルース、鉄鉱と都市成長と題した合衆国の都市を事例にした研究である。エジプトにおける村落生活の現在の問題と新しい様相を扱った論文が続く。さらに北海の漁業と漁港という論稿もある。最後は、西アフリカフランス領、ニジュールの谷における先住民の入植と改良工事と題した報告である。

以上、フランスの代表的な学会誌、地理学年報に掲載された諸論文を一般地理学、リージョナル地理学に大きく分けて、マルトヌスが編集したものである。テーマは必ずしも秩序だっていないが、農村集落の地理学を問題にした部分が一番まとまっている。本書はドゥマンジョンの人文地理学論文選集といったところであろうか。次々と論文を量産して本にまとめないと、後世に優れた研究が埋もれることを恐れてマルトヌスが編集したものである。題名が『人文地理学の諸問題』とつけられたのも理解できる。なお、筆者が手にしているのは、1952年発行の第4版であり、かなりの需要があったということであろう。日本では、出版状況の悪さから古典的な優れた論文集が本になりにくいため埋れてしまい、後進にとって貴重な論文が引用されることもなく、さも新しい考え方のように研究発表がなされることがなくはない。地理学の発展のためにも一考を要する問題である。

2.3 Max Sorre 『人文地理学の生物学的基礎, 人間生態学試論』, 1951年

この本は概論でもなければ、マニュアルでもない (p. 6)。——古風な言い方をすれば“地理学の視角から見た人間と周囲 *entourage* との関係の論述である” (p. 6)。

第1部は気候と人間で、第1章は気候である。気候の定義から始まり、局地的、地域的な気候、

微気候を取り上げる。次に気候の因子と要素、気候要素の結びつき、天気を問題にする。さらに生物学的記号、生物学的段階を論じる。時間の因子（期間）、分類に基づく観察、人間の作用、人工的な微気候が取り上げられる。第2章は気候要素と有機的な機能で、気圧と高度による変動から始まる。次に、適合の完成と期間：生物学的形態を論ずる。さらに、光と化学の領域を論じ、その後は気温、湿度、風が問題となっている。第3章はエクメーネの形成である。まず人間のコスモポリタン性が論じられ、エクメーネの極限界、エクメーネの高距限界、エクメーネの質、メゾ段階の影響と人種の特徴、適応の問題、熱帯気候での白人の適応の危機、暑い地方における地中海人、イギリスの植民、他のタイプの植民、白人の植民からの教訓、小康期間：高地滞在、有色人種、一般的見解が取り上げられている。

次に、第2部と第3部の序が来る。第2部は生きている環境と人間の栄養摂取である。第1章は人間の結社、形成と進展である。結社の豊かさ、並行した2つのシリーズの仮説、耕種と家畜の起源、一般的注記、家畜化の根源的条件、家畜化の進歩、栽培の進歩、アフラジー（アジア・アフリカ、筆者注）の大きな谷、中東と地中海東部の他のセット、アフリカのセット、ヨーロッパのセット、中央アジアと極東、古代からの輸送と混合が話題になっている。第2章は野生種から栽培種へで、家畜の大型の例、変種と家畜、交配と雑種形成、家畜の可変性と環境、動物の家畜化によりもたらされた変化、植物の変化、個と種への人間の熟慮した作用、要約的な一例：ぶどう園で締めくくられている。第3章は人間の結社の維持と均衡の条件で、空間の征服、環境の創設、食人種の分散のエージェントとしての人間、食人種集団の構成：敵対する要素、これら集団の差異化された特徴、人間の結社における寄生、有用な種に対する敵対する要素の闘い、人間の秩序が取り上げられている。第4章は有機体の必要と生きている環境で、有機体の一般的必要、窒素を含む物質とビタミン物質、食人の風習、セルロース、鉱物、塩、興奮剤と麻薬、食料の準備、味覚の変化と食料の変容、食事の分布が取り上げられる。第5章は食料制度の地理学で、制度の要素、原始的食料制度の存続、一要素が非常に卓越した制度、モンスーンアジアにおけるヴェジタリアンの傾向のある混合制度、南アメリカと中央アメリカの混合制度、白人の制度：非都市的制度、現代の変遷：都市的食料制度、食料制度と人文地理学、1 方法、食料制度と人文地理学、2 栄養不足と飢饉、食料制度と人文地理学、3 制度の不均衡の影響、食料制度と人文地理学、4 人種を問題にしている。

第3部は生きている環境に対する闘いにおける人文的有機体である。第1章は病原性の複合体で、人間と環境：病原性の複合体、病原性複合体の一般的構成、複合体の用語、複合タイプの叙述：眠り病、マラリア複合体、ペスト複合体、寄生虫の特殊性と複合体の混乱、病原複合体における人間と家畜集団の地位、複合体の重ねあわせと闘いが問題となる。第2章は病原複合体の生命で、複合体と環境、土壌が及ぼす物理的・化学的作用、外気、病原菌の環境、病原菌複合体の生態学、黄熱、エコロジー問題の困難さ、マラリア複合体の生態学、何らかの視点の討論、複合体の発生、複合体の形成における人間の作用、複合体の内的均衡と維持、適応と免疫性：風土病の条件、病原複合体の均衡と分裂への人間の作用が取り上げられている。第3章は疾病地理学の一般原理：疾病地理学とエクメーネで、一般疾病地理学、病気の関係資料、目に見えない形態、保養地の用語、資料批判、地図学の状態への一瞥、何らかの拡大圏への指摘、叙述的な疾病地理学：原理、一例：地中海の疾病地理学、環境、地中海の衛生と病理学、疾病地理学とエクメーネ、赤道の森林山塊、熱帯地域、マラリアと歴史、病気の伝染と人種破壊を論じている。最後は結論である。

以上、詳しく内容を追ってきたが、後半に来るほど病理学に近づいており、わかりにくい。しかし、これも人文地理学書としか言いようが無い。文献・注は各章ごとにまとめられ、世界図を中心とした図は31あり、このあたりが地理学書といえよう。巻末には追加の文献・注が掲載されている。人文地理学書としてはかなり異質の内容である。なお、本書については野澤秀樹の詳しい紹介がある⁶⁾。

2.4 Jean Bruhnes『人文地理学』要約版, 1956年

ジャン・ブリュヌヌ夫人とピエール・ド・フォンテーヌによって手直しされた要約版である。ジャン・ブリュヌヌはコレージュ・ド・フランスの人文地理学教授であった。市民向けに地理学の公開講座をしている名誉あるポストである。1934年に3巻本で出版されたものを、1943年に1巻本に要約したものである。

第1章は、人文地理学とは何か？自然地理学と人文地理学との間の一般的な関係を論じている。第2章は人文地理学の諸事実をどのように集め、分類するかを扱っている。第3章は人文地理学の主要な事実、第1のグループ：土地の非生産的な占拠の事実、すなわち家屋と道を論じている。第4章は人文地理学の主要な事実（続き）、第2のグループ：植生と動物の征服の事実、耕作と牧畜を問題にしている。第5章は人文地理学の主要な事実（続きと終わり）、第3のグループ：植生と動物の破壊的占拠、荒廃の事実、すなわち鉱業を問題にしている。第6章は人文地理学の総合的モノグラフィーで、第1の例は砂漠の島、スフ Souf（アルジェリア南部のサハラ）と M'zab のオアシスの例を取り上げている。第7章は人文地理学の総合的モノグラフィーで、第2の例はアルプス高地の例外的シマ、アニヴィエの谷（スイス）を取り上げている。第8章は主要な事実を越えてと題し、地域地理学、民族学、社会地理学、歴史地理学を論じている。第9章は地理的エスプリとして、経済学、社会学、歴史学における地理的エスプリ、人文地理学との新しい関係における感染症（風土病、伝染病）の地理学、自然現象と人間活動との結びつきにおける心理的因子、地理条件への人間の適応が論じられる。

全体に関しては、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュが解説している（pp. xii~xv）。本文の中では、多数の図表を基に説明しているし、巻末にはジャン・ブリュヌヌの撮影した117葉の白黒写真が掲載され、詳しい説明がなされていると共に、本文での関連ページが明記されている。巻末の補遺には、各章についての詳細な文献と、それからの引用についての説明がページ毎になされている。引用された固有名詞の索引も詳細であり、18ページに及んでいる。取り上げられた主な用語についても関連ページが示されており、読者への便宜をはかっている。本文中の図も世界各地から集めており、興味ある図が多い。さらに、本文での脚注も詳しく、学位論文の体裁をととのえている。かつて、筆者は言語地域と国境としての分水界との不一致を指摘した箇所（p. 272）を引用したことがある⁷⁾。

本書はフランス地理学派の伝統的な概念、生活様式 *genre de vie* を根底に、丹念に集落や耕作の景観を説明した本である。しかし、その概念が適用できない主題については対象としていない点に本書の限界がある。飯塚浩二は「生活様式を論ずるにあたって、生産関係、社会関係に要約される諸々の社会的要因を無視しては、本質的にいかに片手落ちな（原文のまま）理解しか得られないか」と指摘している⁸⁾。アンドレ・メイニエも生活様式概念への批判について言及している⁹⁾。生活様式概念が風靡した時期の所産といえよう。

2.5 Max Derruau 『人文地理学新叙説』, 1969年

クレルモン・フェラン大学教授、マックス・デュローの『人文地理学新叙説』である。地理学から出発した地理学者が人文地理学の研究にも手を染め、ついには人文地理学の本を書くようになったことは著者の出版物一覧が示している。本書の序では、人文地理学の著作を3大グループに分けている。1つは、資料の主要部分が統計に基づいているものである。——2つ目は自然条件への社会集団の適応を研究したものである。——3つ目は「理論的な」地理学である。

第1部は人口の地理学である。その序では、数値の使用とその批判、人口流動の概念と地理学全体への統合、イタリア南部の例が述べられている。第1章は世界人口の総数で、総数とその増加、世界の過剰人口と適正人口、問題の誤り、大陸別、緯度別、気候帯別の人口配分を地理的視点から述べている。第2章は人口分布の理由で、人間有機体と気候、むかつくような気候、生きている結社における人間、エネルギー、鉱物の潜在資源の役割、社会的経済的システムの役割、歴史の役割が言及されている。第3章は人口変動で、序では要素、研究の方法が述べられる。特に、自然増、移動が詳細に記述されている。第4章は人口構成と人口構造で、性別の構成、年齢別構成、民族別構成、都市人口と農村人口、人口の職業構成、人口の社会構造が図を使って詳細に述べられている。

第2部は人種、言語、宗教、国家である。序のあと、第1章は人種の分布で、そのまた序では分類の基準：人間の起源が述べられている。主な人種としては原始人、白人、黒人、黄色人種が言及されている。第2章は言語の分布で、言語の主な系統の分類として、インド・ヨーロッパ語族、ハミト・セミト語族、コーカサス・バスク語族、北ユーラシア語族、ドラヴィタ語族、東南アジア語族、オセアニア語族、北アフリカ語族、アメリカ原住民語族が記述されている。第3章は宗教の分布で、主な宗教としてキリスト教、ユダヤ教、イスラム教、他の宗教が簡潔に述べられ、宗教事実の地理的影響としてイスラムの例を挙げている。第4章は国家の地理学で、国家のタイプ、状況と空間、国境、行政地理が述べられている。

第3部は生活様式概念、仕組みと経済システムである。序では、生活様式概念が論述され批判される。次に、生活様式概念が定義され、その要素が詳しく説明される。この概念は進歩した社会に適應されるかどうか詳しく論述している。第1章は、生活様式概念による地理的環境への適應のいくつかの類型として、採集、狩猟、遊牧生活が詳しく論述される。一方、巡回する現代の生活様式、余暇の移動、耕作と結びついた生活様式、都市あるいは工業の生活様式は簡単に言及されているにすぎない。生活様式概念が今日の複雑な現代社会に適用できないことを示している。第2章は仕組みと経済システムで、自発的な経済的仕組みが固定価格、強力な経済グループの設立から論述される。第3章は国家の介入であり、経済単位としての国家、国家主義と経済的コスモポリタン主義：超国家的経済連合が述べられる。第4章は経済組織の諸形態で、先進国と開発途上国、新興国の時代遅れの概念、手形経済と設備の経済、資本主義の経済とマルクス主義の経済が論じられる。

第4部は農地地理学である。第1章は概念と方法で、農地全体の要素、気候、起伏と土壌、耕作システム、耕地類型、牧畜、生活様式（第3部、111～133ページ参照）、農地の社会構造、農村景観（非常に詳しい）、農村集落、農地地理学における人口学の観点から詳しく述べられている。最後に、要素間の相互依存が述べられている。農地地理学の研究方法が、これまた詳しく論述される。次に、農地整備で、旧世界地中海地帯と大陸地帯の農地整備、温帯と寒い「新

興」国の農地地理学，集団農場の農業が取り上げられている。第3章は農村集落の諸問題である。集中と分散が簡単な数式を基に計算しながら説明される。次は，位置と村落形態である。さらに農家家屋が多数の図や写真を使って説明される。以下，煩雑になるので大枠だけを示す。

第5部は非農業的活動である。第1章は漁業，第2章は工業，第3章は第三次産業，商業と観光，第4章は交通が，第4部までの記述と同じ詳しさと論述されている。

第6部は都市である。都市の機能，位置と増加（成長），都市の限界，地域の中の都市，都市シリーズを，図・写真を使って丹念に説明している。

最後に結論として，空間の組織，地域概念を取り上げて，水の問題，空間組織と輸送路，空間整備の他の様相，地理的統合と空間整備の範囲：地域を取り上げて終っている。

以上のように，本書の取り上げる内容は極めてオーソドックスな人文地理学であるが，広範囲のテーマを多数の図や白黒写真を提示しながら懇切丁寧に説明している点が良い。イタリック表記も多用しているし，小見出しも多い。巻末の文献案内も詳しい方であり，よく調べたものである。しかし索引の項目は多いが，引用ページの言及はそう多くはない。学位論文のページ数を超える膨大な著作といえる。かつては地形学から出発し，人文地理学の本を書くようになった者，例えばジャン・ドレッシュ，ジャックリーヌ・ボージュ・ガルニエ，アンリ・ノンなどがいたが，その1人といえよう。

2.6 Paul Claval 『現代の人文地理学と経済地理学』，1984年

数々の著作を公刊しているソルボンヌの教授，ポール・クラワルの人文地理学書である。本書の刊行までに共著を含め，既に19冊を出している。まえがきでも述べられているように，本書は数年間の地理学史の講義ノートであり，ケベック，モンリオール，ミネアポリス，パリの学生との対話から得たものを盛り込んだもの（p. 6）であるという。

第一部は地理学概念の変遷であり，第1章は19世紀の地理学である。18世紀と19世紀の転換期における地理学の誕生の問題を論じている。1780年代から1920年代にかけての社会的需要，哲学の影響，基礎技術と地理学の関係を図示している（図1-1）。第2章は地理学の古典的3つの概念，地域，人間と環境の関係，景観を通じてみた1つの例：モンリオールとケベックである。図を使いながら両者を比較している。第3章は1900年と1950年との間の地理学：国家的学派的期間である。20世紀初頭の地理学発展の一般的条件，フランス学派，ドイツ学派，アメリカ学派，他の学派（イギリス，ロシアなど）について述べ，その期間は半世紀と短かった（p. 85）と指摘する。第4章は1950年と1960年間の「大」革命である。革命の背景に：不満足な感情，哲学と他の社会科学の影響，新しい地理学：主な流れが説明される。第5章は1970年代：懐疑と優柔不断の期間である。世論の新しい態度，人間の科学についての新しい認識論，1970年代の地理学：あふれだした科学革命，最近の進展の解釈が述べられている。第6章は現代的概念によるモンリオールとケベックである。1960年代の系統地理学者によって見られたケベックとモンリオール，1970年代の理論研究の発展から見られた両者，ケベックとモンリオールのラディカルな見方，ケベックとモンリオールの現実の現象学的理解に対するまがいものと本物が述べられている。

第二部は社会科学としての現代の地理学である。第7章は生態学のモデルで，生態学的モデルの消化の段階，人文地理学の生態学的基礎への研究の寄与が述べられている。第8章は社会的モデル：1 基礎と共通点として，人間から空間への関係：空間の法的基礎，技術と人間と

環境との関係、3者間同士の関係、中心と周辺が述べられる。第9章は社会的モデル：2 経済地理学で、経済地理学の形成、伝統的経済地理学と空間経済の統合、1970年代の新しい方向が述べられる。第10章は社会的モデル：3 社会地理学と政治地理学で、社会地理学の萌芽、政治地理学の幸運と不運、考察の深化と人文的、社会的、政治的、経済的地理学における理論的一貫性の進歩が述べられる。第11章は地理学における人間のモデルで、地理学における人間の古典的モデルの哲学的原典、新しい人間のモデルが述べられる。図11-1から図11-4はこの世界と他の世界とのトポロジーを伝統的な社会、古典的なヨーロッパ社会、現代のヨーロッパ社会における俗と聖の世界を示している。

第三部は現在の論争と展望で、第12章は歴史と文化、歴史地理学における展望の進展、現代の歴史地理学、現代の文化地理学の先行者、文化地理学の新しい出発が論じられる。第13章は都市と農村：経済と社会で、都市への知識の拡大、都市の論理、農村地理学の多面性、農村界についての最初の統合：農地景観と農民社会、農村界と農村性に関する新しい見方が論じられる。第14章は景観と地域：社会的、経済的構造への名残りで、景観を発見した地理学者たち、景観の新しい概念、古典的な地域地理学、空間の組織：地域、国家、領土の多様性の新しい信仰が論議される。第15章は熱帯と開発で、熱帯地理学の誕生と地帯的視点、地理学と開発の諸問題、熱帯と開発に関する新しい視点が述べられる。第16章は現実と可能性で、世紀の前半という視角における現実と可能性、テクノラートの時代、可能性と想像性：ユートピアと整備が述べられる。第17章は資源と立地で、生産活動の立地と空間における人間の分布、場所の消費と地球上の人間の分布、資源、土地の境界と世界的均衡が述べられる。最後に一般的結論が来ている。

本書は人文地理学のあらゆる分野にはほぼ目を通し、これまで発表してきた系統地理学の様々な研究書を土台にして人文地理学研究の進展と限界を大局的に論じたスケールの大きな著作である。日本では系統地理の専門家が分担執筆し、編者がまとめる形式のものを1人で行っており、その偉業がわかるというものである。草稿を基に論述しながら、受講生の学生との対話を通して修正をはかった意欲作である。一字一句をゆっくり話ながら草稿を推敲してゆく、フランスの講義スタイルが大作を可能にするのであるが、本書の性格から言って、索引は欧米を中心とした著者名索引が主であり、次に事項索引が簡潔に整理されている。

2.7 Pierre Merlin『人文地理学』, 1997年

パリ第1大学（パンテオン・ソルボンヌ）の教授で、多数の著作のあるピエール・メルランの人文地理学書である。まえがきでは、筆者がこれまで検討してきたフランス語版人文地理学書の考察と同様、不完全であるとか、認識論に走りすぎていると批判しつつ（p. 8）、本書を書き上げた意欲作である。

第一部は科学領域における人文地理学の位置で、第1章は人文地理学の出現と相次ぐ概念である。人文地理学の出現、人文地理学の相次ぐ概念、新しい地理学の試みが述べられる。第2章は人文地理学と自然環境で、地理学、生態学と環境、環境の制約と自然の危機、環境への人間の作用の影響が述べられる。第3章は人文科学と社会科学の寄与で、人類学と地理学、歴史と地理、社会学と地理学、地理学と人口学、経済学と地理学をジャン・ブリュヌやマックス・デュローの図を引用しながら説明している。まえがきでは、彼らの著作を批判していたが、先学への敬意とみるべきか、あるいは利用できるものは拝借というべきか。

第二部は人口の地理学である。第1章は空間における人間の分布で、エクメーネ、すなわち、居住空間、人口増加の不均等性、局地的レベルでの人口の分布が述べられる。第2章は人口の構造で、人口の構造、社会的経済的構造、フランスの人口構造が述べられる。第3章は人口の自然動態で、人口状況の分析方法、世界全体にわたる死亡率の減少、世界全体にわたる妊よう率の減少、人口の変遷を多数の世界図を作成しながら説明している。第4章は移民の動きで、移民の分析方法の諸問題、国際移動、決定的な国内移動、一時的な移動が述べられる。第5章は人口の展望で、投射の対象：展望か予想か、人口の投射の確立方法、フランス人口の展望が述べられて終ることでわかるように、第5章は従来には無い新しい試みである。

第三部は空間における人間活動である。第1章は農業・工業である。農業の自然条件、農業経営の方法、農業経済、漁業がオーソドックスに記述される。第2章は工業である。工業分類、工業化の大類型、工業立地、工業と空間動態が述べられる。第3章は第3次産業で、第3次産業の定義と分類、固定的な第3次産業、流動と結びついた第3次産業が述べられる。

第四部は都市と農村である。第1章は農村の組織で、農村空間の占拠、農村集落、農村と都市的生活様式が取り上げられている。第2章は都市の発生と発展で、都市の定義についての研究、都市と歴史、空間の中の都市、人口、都市の産業と生活、都市と地域：都市網が述べられる。フランス地理学派の伝統そのもののまとめかたである。

第五部は空間への意欲的な介入：国土整備、入門：整備と様々な尺度である。第1章は地政学である。地政学、昔の態度、軍事的・戦略的専念（古代、中世と近代）、経済的・商業的専念、文化的・政治的専念、結論として地政学は国土整備以上であると評価している。第2章は国土整備で、国土整備の対象、国土整備の手段、ヨーロッパにおける国土整備政策のいくつかの例が取り上げられている。第3章は地域整備で、パリ地域の整備、オート・プロヴァンスにおける地域的農村整備が代表例として取り上げられている。第4章は都市化で、都市化の進展、都市化の法的資格、領域と土地、都市化の方法、都市化の手続きが述べられる。第5章は輸送の計画化、構造化する部門的整備の例で、輸送、空間、貨幣と時間の交換様式、輸送需要、輸送供給、輸送の計画化の争点、空間組織と輸送が独自の図を交えながら述べられる。

第六部は現代の地理的大問題である。第1章は資源と人口で、理論的人口学の教育、天然資源を枯渇させる危機、化石エネルギーと更新するエネルギー、食料と飢饉が論述される。第2章は開発と低開発で、開発と低開発の概念、経済と両極的社会、低開発の地理的因子、空間の分割と整備の役割が述べられる。第3章は政治生態学の始まりで、政治生態学の概念、音、汚染が述べられる。最後に、結論が来る。

本書は第一部から第四部までがフランス人文地理学の伝統に沿った驚くほどオーソドックなまとめかたをしていて、新鮮味はあまりない。簡単な数式を提示したり、イタリック体を多用するなどメリハリのある文章ではあるが。本書が異彩を放つのは、第五部からで、国土整備に関する地理学研究的蓄積、現代的な諸問題に関する地理学からのアプローチの増加という背景があるとしても、現時点でよく整理したといえる。112図に及ぶ引用、自己作成の図を基に本文を書き進めているので理解を助けるが、一部再転用のためか、不鮮明な写真が掲載されている。かすれた図（例えば、p. 435）や線の消えかかった図もあり、書き直したほうがよい図が散見するのが玉にキズである。巻末の文献は部ごとにまとめられているが、フランス語文献を主に詳しいほうである。しかし、索引は人名も事項名も共に無い。写真も皆無である。多作の著者としてはそこまで手が廻らなかつたということか。フランス語版人文地理学概説書の集大

成とも言える本書にあっても、必ずしも万全ではない点が惜しまれる。

3 索引からみたキーワード

フランス語版人文地理学書は著者の死後編纂されたり、個人で書かれているため、膨大な事項索引は不完全か全く無い。次々と本を書いている著者にとっては、貴重な時間を割いてまで煩雑な事項索引作りをしないようである。詳細な目次を見れば、ある程度どのような内容の書物であるか判別できるからである。また、ある事項から百科事典の検索のように読まれることを警戒していることも考えられる。その点、人名索引、地名索引はその心配がないので、比較的充実している。次に見るように、索引からキーワードを探すことは困難であるし、まして英語版のようなキーワードの変遷を検討することはできない。参考までに挙げるにとどめたいし、書かれた内容によることがよくわかる。

Vidal (2.1) は地名と事項の索引が一緒に、事項については少数例しか挙がっていないのでキーワードを選ぶことはできない。草稿を体系づけてとにかく本にまとめることに主眼があったろうし、ヴィダルの草稿自体がメモ書き程度で未完成の部分が多すぎたためのように思われる。

Demangeon (2.2) は関係者の編集のためか、そもそも索引自体が作られてない。

Sorre (2.3) は気候34, 食料制度34, 小麦32, 豚28, とうもろこし26の順である。生活様式概念の適用が、これら用語への言及の多さから読み取れなくもない。

Bruhnes (2.4) は都市40, 入植30, 家屋27, 文化25, 生活様式23の順である。

Derruau (2.5) は入植28, 大衆的民主主義25, 社会的22, 移民16, 家屋15である。

Claval (2.6) はモデル50, 学派46, 景観38, 文化25, 空間24, イデオロギー24である。理論構築の本であることを示している。

Merlin (2.7) にはそもそも索引自体がない。

以上に見るように、キーワードがあってもばらばらで、英語版人文地理学概説書のように索引からキーワードの変遷を見ることはできないし、研究動向の変遷を見ることもできない。

4 おわりにかえて

そもそも人文地理学の概説書が少なく、しかも個性豊かに編集されたり、執筆されているフランス語版人文地理学概説書にあっては、英語版のそれと比較することには無理がある。いずれの著書も個人で書かれており、共著や分担執筆あるいは個人は別として、論文の選集から成っているものが1冊も無いからである。個人主義の強いフランス人地理学者からくるためなのかどうかはわからないが、たまたま7冊は1人で書かれていたということである。生活様式概念への連続性と、それを否定する新しい人文地理学の構築がある。「連続性と斬新さ：これこそフランス地理学研究の2つの両極端である。両者の間に、多くの研究者と出版物が存在する。」(ポージェ・ガルニエ)¹⁰⁾。以上7冊の人文地理学概説書の中にも、フランス地理学の伝統的記述と著者個人の斬新的記述が息づいている。

注

- 1) 大嶽幸彦 (2005) : 英語版人文地理学概説書についての一考察, 上越教育大学研究紀要24巻2号, pp. 393~409
- 2) G.Chabot et al. éd (1957) : La géographie française au milieu du XXe siècle. J.-B.Baillièere et fils. 335P
- 3) 渡辺 光 (1971) : 地理学の多様化と一元性に関する問題点, 地理学評論 第44巻第7号に掲載, 渡辺光先生追悼録刊行会編『渡辺 光 その人と仕事』所収, 1985年, pp. 3~24
- 4) ブラーシュ著・飯塚浩二訳 (1940) : 人文地理学原理. 上, 下, 岩波書店, 295P と315P
- 5) 谷岡武雄 (1973) : 地理学への道. 地人書房, pp. 166~179
- 6) 野澤秀樹 (1996) : フランス地理学の群像. 地人書房, pp. 104~115
- 7) 大嶽幸彦 (1989) : 地誌学研究法序説. 大明堂, pp. 135~136
- 8) 飯塚浩二 (1950) : 人文地理学. 有斐閣, p. 273
- 9) André Meynier (1969) : Histoire de la Pensée Géographique en France (1872-1969), P.U.F., pp. 153~154
- 10) Comité nationale français de Géographie (1984) : La recherche géographique françaises (Structures, Thèmes et Perspectives) . XXVe Congrès Internationale de Géographie, p. 265

引用文献

- P. Vidal de la Blache (1921) : Principes de Géographie humaine. Armand Colin, 327P
 Albert Demangeon (1942) : Problèmes de géographie humaine. Armand Colin, 408P
 Max Sorre (1951) : Les fondements biologiques de la géographie humaine, Esaii d'une écologie de l'homme. Armand Colin, 447P.
 Jean Bruhnes (1956) : La géographie humaine. P.U.F, 395P
 Max Derruau (1969) : Nouveau précis de géographie humaine. Armand Colin, 576P
 Paul Claval (1984) : Géographie humaine et économique contemporaine. P.U.F., 445P
 Pierre Merlin (1997) : Géographie humaine. P.U.F., 579P

参考文献

- André Meynier (1971) : Guide de l'étudiant en géographie. P.U.F., 159P
 Pierre George éd. (1970) : Dictionnaire de la géographie. P.U.F., 448P
 モーリス・ラヌー著・古野清人訳 (1953) : 人文地理. 白水社, 223P
 谷岡武雄 (1966) : フランスの農村. 古今書院, 436P
 アンドレ・ショレー著・山本・正井・田中共訳編 (1967) : 地理学の方法論的考察. 大明堂, 171P
 マクシミリアン・ソール著・松田 信訳 (1968) : 地理学と社会学の接点. 大明堂, 215P

- 水津一朗先生退官記念事業会編（1986）：人文地理学の視圏. 大明堂, 837P
野澤秀樹（1996）：フランス地理学の群像. 地人書房, 323P
西村孝彦（1997）：文明と景観－フランス人文主義地理学－. 地人書房, 279P
高橋伸夫編（2003）：21世紀の人文地理学展望. 古今書院, 715P
森川 洋（2004）：人文地理学の発展－英語圏とドイツ語圏との比較研究－. 古今書院, 217P

A Reflection on Some Human Geography Books written in French

— from the Decades of 1920 to 1990 —

Yukihiko OHDAKE *

ABSTRACT

The object of this research consists of a reflection on some human geography books written in French. The author has analysed the contents of seven books. He has quoted some parts of their contents, and tried to give them some consideration.

* Division of Social Studies ,Department of Humanities and Social Sciences